

ベートーヴェンとフリースタイル

山下洋輔

(ジャズピアニスト)



©Jimmy & Dena Katz

「自分のフリースタイルの根底には、ベートーヴェンの作曲の発想がある」

日本を代表するジャズピアニストの山下洋輔は語る。
音楽大学の入試で初めて向き合ったピアノ・ソナタ第6番、
和太鼓とセッションした《月光》ソナタ。
ジャズマンにとってもベートーヴェンは楽聖なのだろうか？

ベートーヴェンはぼくにとって自然に影響を与えてくれた存在です。その音楽の作りが実に個性的で、普遍的というか理にかなって、盛り上がるにつれて展開していくその手法は、とにかく力強く、美しいと思っています。

昔からベートーヴェンの音楽に親しんでいたかという、実はそうではないのです。ぼくの母がピアノ教師ということもあり、幼少のころからいつも身の回りに音楽があふれていました。母がベートーヴェンの曲をピアノで弾くということはありませんでした。母は「ベートーヴェンは力がないと弾けない」と言って、ショパンやシューベルトをよく弾いていました。だから主にそのような音楽を聴いて育ちました。

何度も聴いた《田園》交響曲

初めてベートーヴェンの音楽に触れたのは小学生のとき、母親が当時の電気蓄音機でSP盤をかけたのがきっかけでした。流れてきたのはベートーヴェンの《田園》交響曲。母が好きで、それからは何度もその曲が家で流れていました。母のピアノではなく、レコードで聴いたのが始まりだったのです。

《田園》は表題音楽的なところがありまして、

ストーリーがあります。「田舎に到着したときのわくわくした気持ち」から始まって、「小川のほとり」「雷雨」など、子ども心にもとてもわかりやすく、夢中になりました。本当に毎日のように聴きました。第一楽章のずっと繰り返す、♪タンタラタンタン、タンタラタンタンというあのフレーズが、今でも耳元で浮かび上がるほど印象的でした。繰り返しがしつこかったのをよく覚えています（笑）。

ただ、残念ながら誰の指揮だったのかは、覚えていません。当時、SPを出していた有名な巨匠だったんでしょうね。

実際にピアノでベートーヴェンを弾いたのは、それからだいぶ後、音楽大学受験のときです。高校でジャズを始めてしまった頃は、卒業後プロのジャズピアニストとして仕事をしていたのですが、そのときに思ったのです。「クラシック音楽という人類の財産を知らずしてジャズを続けていいものか」と。

先ほど述べたように母親の影響もあって、子どものころからクラシック音楽を聴いていたからその考えだと思えます。

しかし、クラシック音楽の基礎はピアノで学んだわけではありませんでした。子どものころは真面目にピアノを弾いていなかったのです。

小学校のときにはもうすでにデタラメ弾きができていた頃は、フォスターなどの簡単な曲を右手で弾いては左手でドミソ、ドファラと伴奏を弾いていました。

当時、ぼくは母親のもとヘレックスに来る子どもたちがやっているような「バイエル」の練習曲も、すぐに聴いて覚えて、彼らが帰った後に勝手に弾いていました。そうすると母親は喜んで、「あんたが今弾いているのはこれだから」と言って楽譜をもってくるわけです。そして、「その楽譜を見て弾きなさい」と言う。そのやり方がどうしても嫌でした。耳で聴いたものを弾けるのに、なぜ楽譜を見なくてはいけないのか。

それで、「嫌だよ」と言って母親の正式なレッスンをやめたのです。すると母親は、「それならこれをやりなさい」とってヴァイオリンをもってきた（笑）。

そんなわけでヴァイオリンはおとなしく習いました。そのときにクラシック音楽の基礎というものを初めて教わったのです。そのような知識が少しあったがために、ジャズをやっているながらもその重要さに気がつき、だからこそよけいにクラシック音楽を学ばなければいけない気がしたのだと思います。